ログアウトの先に

アルタイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ログアウトの先に

【Ｎコード】
Ｎ２９３５ＢＡ

【作者名】
アルタイル

【あらすじ】
世界初のＶＲＭＭＯ『エデン』がデスゲームと化して、数年の月日が経過した頃。それまで難攻不落とされてきたラストダンジョン『天界の塔』も、ついに攻略される時が来た。主人公のアルクは、塔の最上層にたどり着きゲームクリアを成し遂げた――はずだった。しかし、彼がログアウトした先は彼の知っている世界ではなく――――。ゲームの力を得たアルクは新たな世界で何をなし、何を見るのだろうか？

プロローグ

ＶＲＭＭＯ『エデン』。

西暦２１１２年に日本のメーカーが開発した、世界初となる仮想現実システムを搭載したゲームである。通称カプセルと呼ばれるベッド型の機材を用いることによって、あたかも異世界にいるような感覚を体験できることを売りにしたゲームだ。最盛期のプレイ人口は高額な機材を用いるにもかかわらず三百万を数え、同時接続人数は二十万人を超えるほどの人気だった。

ただし『エデン』がゲーム史に燦然たる功績を残すことはなかった。

膨大な情報量を処理するために導入された、これまた世界初となる有機量子コンピュータ。後に神話の悪魔のごとく語られることとなる『ＳＥＬ－２１０９』により、理想郷となるはずだった『エデン』は血なまぐさい惨劇の世界と化したのだから――。

天界の塔・第九十九階層。

『天上世界を目指す』をコンセプトとして掲げる『エデン』のラストダンジョンとも言うべき場所。そして『ＳＥＬ－２１０９』の指定した最後の攻略目標。かつて、現実への帰還を目指した数万ものトッププレイヤーたちの猛攻を弾き続けた難攻不落の伝説を持つ

塔である。

徘徊するのは魔王のごとき最上級モンスターばかり。プレイヤーの行く手を阻む壁は迷宮のごとく入り組み、毒や麻痺などの罠が所狭しと張り巡らされている。ゲームバランス完全無視――そう揶揄される塔の最上層手前に、今宵、ついに一人の少年が降り立った。

数万ものプレイヤーを跳ね返し、数千もの骸を喰らった悪魔の塔。その塔の長きにわたる難攻不落伝説も、ついに終焉を迎える時が来たのだ。

「あと一階で……」

黒衣に身を包み、顔を隠しているため表情は様として知れないが、少年の声は明るかった。思えば彼――アルクとギルドの仲間たちは、どれほどの時間と犠牲をこの塔の攻略に捧げてきただろうか。百名を超えたアルクのギルド『星空の夜明け』も、攻略の度に一人減り、二人減り……。十三度目の攻略となる今回まで生き残ったのは、たったの十一人。その十一人も、アルクを除いてみな道半ばで死んでしまった。

だが、その犠牲や苦労はもうすぐ報われるのだろう。いまアルクの眼の前には、最上層へと続く階段が広がっている。白く輝かんばかりの階段は、まさに天上へ――現実へと続くにふさわしい。アルクは眼をうるませながら、白銀の階段を一歩一歩踏みしめていく。この階段を昇りきった時、まだ『エデン』に残されている数万のプレイヤーたちは現実へと帰還する。『星空の夜明け』のメンバーやその他のプレイヤーの犠牲は報われ、この美しくも悲惨な世界より解放されるのだ。

「これで最後」

決意を込め、アルクは天上への最後の一歩を踏み出す。思えば、デスゲームが始まってから三年もの月日が流れていた。その間にあったことは決して少なくはない。だが、想い出深いこの世界とも間もなく永遠の別れを迎える。

足が百階層の床を叩いた。同時に、スウッと意識が光にのまれた。視界が白一色に覆われ、身体が重さを失った。魂がふわりふわりとどこかへ抜けだしたようだった。思考が鈍り、どこか温かな感覚が心を包む。毛布にくるまれたような心地よい光の世界の中で、アルクは声を聞いた。

『おめでとう、ゲームクリアだ。また現実(リアル)で会おう』

第一話

鼻に詰まるような濃密な埃、漂う黴の匂い。じっとりとした湿気が身体にまとわりつき、不快指数はとうに１００％を超えていそうだった。

気がつくと、アルクは暗く陰湿な部屋にいた。かなり広い部屋のようで、そのほとんどが闇にうずもれてしまっている。アルクは寝ていたカプセルから重い身体を起こすと、辺りを見回す。

「……センターかな？」

『エデン』をプレイする人間の大半は、センターと呼ばれる専用施設を利用していた。カプセルは非常に高いので、センターにおかれているものをレンタルするのである。一部の富裕層などはカプセルを自宅に設置しているそうだが、アルクは大多数のセンター派に属していた。

「おーい、誰かいないのか？」

暗闇に向かって叫ぶアルク。だが、返事は返ってこない。どうやら誰もいないようだった。しかたなく、彼は一寸先もまともに見えない闇の中をおっかなびっくり歩き始める。すると、数歩進んだところで何か大きくて丸いものにぶつかった。

「カプセル？」

表面が信じられないほど分厚い埃に覆われているが、それはカプセルのようだった。卵型の、かなり独特の形をしているのですぐに

わかるのだ。アルクは恐る恐る、スイッチに手を掛けて蓋を開く。運が良ければ、生存者が出てくるはずだ。もし運が悪ければ――死体が出てくるだろうが。

「えっ？」

カプセルの中身は、アルクが想像していたようなものではなかった。白い、さらさらとした粉のようなもの。時折ごろっと小石のような塊が混じっているそれは、パッと見ただけでは正体がわからない。アルクは何だろうと思い、手ですくい上げてみた。すると――

「骨……」

粉のような物の中に、棒のようなものがあった。それを見た瞬間に、アルクは正体を察する。人骨だった。風化してもはや形もろくに保っていないがそれは紛れもなく、人骨だった。『エデン』の中でアンデットモンスターを幾度となく見た直人には、それがはっきりとわかる。

「な、何が起きたんだ？」

骨が形もなくなるほど風化するには、どれほどの年月が必要だろう。アルクは理系ではないが、それがたった数年の間には起きないことぐらいはわかる。どう考えてもこの骨の主は、数十年前には命を落としていなければならないはずだった。

誰もいないセンター。得体の知れない白骨。心の中を黒いものが満たしていく。アルクは勢いよくカプセルの蓋を閉めると、ドカドカと足を踏み鳴らすように歩き始めた。肩で風を切るその様子は、恐怖を前に虚勢を張っているようだ。

そうして歩き出すと、すぐに彼は壁にぶつかった。ドーンと音が響き、コンクリートの壁が崩落する。壁の風化もまた、恐ろしいほど進んでいるようだった。彼は不安にさいなまれながらも、壁の向こうへと出る。すると、そこもまたカプセルがおかれている部屋だった。ただ、先ほどまでとは違いわずかに明るい。

光の正体は苔だった。緑色の苔が、夜光塗料よろしくかなりの明るさで光っている。それが風化して白くなった天井や床を照らしているのだ。アルクはその光に吸い寄せられるように、苔へと近づいて行く。

「ヒカリゴケ……？」

ヒカリゴケ。『エデン』のダンジョンなどに多くみられる植物だ。おもに松明の代わりとして使用されるもので、アルクもそのお世話になっている。しかしそれが、なぜセンターに生えているのだろうか。アルクは興味の赴くまま、ゆっくりと光に向かって手を伸ばす。その時――

「動かないで。そこにじっとして」

背中に冷たいものが突きつけられた。とっさのことに、アルクは後ろを振り向こうとする。が、頭を手で押さえられてしまった。

「な、なんだよ！　いきなり何を！」

「静かに」

「おい、ちょっと」

顔も姿もわからぬ声の主は、そのままアルクを床に座らせた。声の高さからすると、少女だろうか。彼女はアルクの頭を地面に押し付けると、その身体の隅々まで手でたたく。執拗なほどていねいに、さながらどこかのボディチェックのようだ。

そうして局部までも確かめられたところで、少女のはっという息がアルクに聞こえた。彼はやっと済んだかと肩を撫でおろす。

「驚いたわ。あなた、モンスターじゃないのね」

「そんなわけないだろ！　大体モンスターってなんだよ、ここは現実だろ！」

アルクは自分でも驚くほどの力で手を振りほどくと、声の主の方を見た。アルクの眼が見開かれ、思わずはっとする。

声の主はアルクの予想通り少女だった。しかも、天使のように神々しく美しい。銀色の髪はかすかな光に透け、処女雪のような肌は煌かんばかりに輝いている。顔立ちもそれに見合う奇蹟的な造形で、非の打ちどころがなかった。背筋がゾクっとするほどの美少女――これにあったのはゲームでも現実でも初めてだ。彼は思わず、言葉を失う。

「……あなた、名前は？」

「えーと……」

少女の問いに、慌てて答えようとするアルク。だが驚いたことに、彼は現実での名前が思い出せなかった。十数年間呼ばれ続けてきた、

自分の名前がである。まるでその部分だけ抜き取られてしまったかのように、記憶が抜け落ちている。

「あなたも名前が思い出せないのね。……プレイヤーネームでいいわ」

「アルク。一応、星空の夜明けってギルドのマスターをやってた」

「あなたがアルクなのね！　私はスーリア、あえて光栄よ」

冷たい顔をしていたスーリアが、始めて笑った。彼女はアルクを立ち上がらせると、ほっと息をつく。

「ふう、ちょっとだけ希望が見えてきたわ。今ちょうど、モンスターの群れに襲われてたの」

「だからモンスターなんて……」

「チッ、見つかったわ！」

アルク達の後ろの物陰で、衣擦れのような音がした。二人が振り向くと黒い影が眼に飛び込んでくる。黒いローブを身にまとい、鈍く輝く大鎌を掲げる骸骨。ヒカリゴケの光に照らされた影は、そんな姿をしていた。

「リーパー……！」

リーパー、通称『死神』。『エデン』において最もたくさんのプレイヤーを殺したとされるモンスターと同じモンスターが眼の前に現れた――。

第二話

リーパーの虚ろな眼差しが身体に突き刺さる。アルクの感覚が凍った。仮想ではない、生の死の感覚。それの何と冷たく残酷なことか。アルクは足がすくむような気がした。

「急いで！　逃げるわよ！」

スーリアが茫然としているアルクの手を掴んだ。彼女はそのまま彼の手を引っ張りつつ、一目散に走り出す。後ろから響くおぞましい声。さながら亡者の呻きのようなそれに身を縮ませつつも、スーリアは部屋の中を突っ切っていった。

「なんでリーパーが居るんだ！」

「わからないわ！　居るものは居る」

「ここはエデンの中なのか？」

「さあ、こっちが聞きたいぐらいよ」

正気を取り戻したアルクの質問に、冷静に答えるスーリア。二人は風化したコンクリートの壁を強引に突き破り、部屋の外へと飛び出した。外に出てみると幸い、そこは広い廊下になっていた。加えて、ところどころにヒカリゴケが繁殖している。二人は一気に加速すると、最寄りの部屋の扉へと飛び込んだ。おそらく動きの遅いリーパーはまだ、先ほどの部屋の中だろう。二人は近くの壁に背中をあてがうと、荒れた息を整える。

「はあはあ……。巻いたかな？」

「ええ、でもまたすぐ見つかるわ。奴らは匂いを追ってやってくる」

「匂い？　リーパーにそんなスキルあったか？」

リーパーを始めとする上位モンスターたちは索敵スキルというものを備えている。これは一定範囲内に居る敵を自動的に感知するもので、モンスターたちはこれをもとにプレイヤーたちに襲いかかる。だが、匂いを探知するスキルなどアルクは聞いたことがない。トップギルドのマスターとしてモンスターの情報には詳しいはずだが、これが初耳だ。

「ゲームのリーパーにはなかったわ。だけど、さっきの奴らは持ってる。あいつらは人間のにおいを嗅ぎつけて、地の果てまで追いかけるのよ」

ぞっとしない話だった。アルクの顔が蒼白になる。モンスターに殺される――最悪の結末だ。彼は思わず意識が飛びそうになった。しかしここで、スーリアがほんの僅かに微笑む。

「心配することはないわ。さっきは群れだったけど、今の奴は単体だった。あなた、星空の夜明けのマスターなんでしょう？　だったら、群れは無理でも単体ぐらいならなんとかなるわよね？」

「馬鹿言うなよ、それはゲームでの話だ。リアルであんな化け物に勝てるかよ」

「大丈夫、私たちの体は完全ではないけどアバター準拠の能力になっているわ。ほら、気付かなかった？　風化しているとはいえコン

クリートの壁を突き破るなんて、並みの人間じゃ無理よ」

そう言われれば確かにそうであった。普通の人間にコンクリートの壁など破れるはずがない。すっかりアバターに慣れていたので、アルクはそのことを失念していた。硬直していた彼の顔が、わずかに緩む。

「じゃあ、スキルとかも使えるのか？」

「それはわからないわ。確かめようとした人は居たけど……喰われた」

「く、喰われた？」

「ええ……」

スーリアは顔をうつむけにした。表情に陰が現れる。緋色の瞳が僅かだが深い闇を帯びた。

「生存者はもともと九人居たわ。だけど、四人はカプセルが開くとすぐにワイルドウルフに喰われて、残りの五人も私以外はみんなリーパーの群れに喰われた……」

アルクの顔が凍りついた。彼の眼は限界まで見開かれ、血走る。だが、スーリアは落ち着いた様子で話を続けた。

「さっき言ったリーパーが匂いを探知するとか、私たちの能力がアバター準拠だというのはみんな、生存者たちが命を賭けて何とか発見した事実なの。だから、全て確かなことよ。その情報を受け継いだ私たちは……彼らの分も生き延びなくては」

「……そうだな。生きよう」

アルクはしっかりとした口調でうなずいた。だが、その顔は何となく煮え切らない。まだ実感というものがそこまで沸かないようだ。しかし、スーリアはそんな彼を見て優しく顔をほころばせる。

「よし、じゃあさっそく……来たわ！」

背後の壁が、唐突に突き破られた。アルクとスーリアは慌てて前方の扉を破壊し、廊下へと飛び出す。その後をリーパーの黒い影がスウッと追いかけてきた。二人は全速力で廊下を走っていく。するとほどなくして、突きあたりにぶつかってしまった。

「チッ、硬い！」

突きあたりの壁は硬かった。二人が力いっぱい突進しても、小揺るぎもしない。おそらくこの壁にだけ張られている薄い金属板が、内部の風化や腐食を防いでいるのだ。二人は幾度となく壁にキックやタックルを喰らわせるものの、壁に風穴を開けることができない。その間にも、リーパーは着実に迫ってくる。

「まずい……」

「こうなったら一か八かだ！」

ゆらゆらと揺れながら迫ってくるリーパー。アルクはその影を見据えた。彼は両手を前に突き出し、精神を静めて呪文を唱え始める。

「頼む……出てくれ。……プラズマボール！」

これが出なければおしまいだ――アルクの思念は極限まで高まる。世界が歩みを緩め、時の流れが緩やかになった。アルクの頭の中を何かが爆発したような感覚が駈けめぐる。瞬間、閉じていた回路がつながったような開放感がアルクを満たした。

彼の手のひらが燃えるように熱くなる。周囲の光が手のひらに集まり球を形成していく。やがて野球ボールほどに育った光の球は、リーパーに吸い込まれるように飛んでいった。暗闇の中に光の弧を描き、球は綺麗にリーパーの中心へと直撃。

溢れる閃光、吹き荒れる爆風。

黒い影の中で、光が爆発した。リーパーの身体を稲妻が走り、動きが大きく鈍る。流体のように動いて居た影は、さながら壊れかけのロボットのごとくぎこちない動きになった。

「やった、つかえたぞ！　さあ、今のうちに！」

「ええ！」

動きが鈍っているリーパー。そのわきをすり抜け、二人は再び深い闇の奥へと逃げ去っていった――。

第三話

先を見通せない暗闇の中。アルクとスーリアは息をひそめ、身を小さくしていた。二人がリーパーの襲撃を辛くも逃れてからすでに数時間。二人はモンスターに見つからないように闇にまぎれつつも、施設の出口を捜して彷徨っていた。

「クッ、これじゃ出口がどこだかさっぱりわからないぞ……」

「せめて明りだけでもあればね……」

小さく悪態をつく二人。ヒカリゴケが生えているのはセンターの一部だった。建物の大半は、闇に閉ざされてしまっている。スキルを使って明りを取ることもできることはできるが、そんなことをすればすぐにリーパーが駆けつけてくるだろう。二人は安全のために、暗闇の中を手さぐりで進むしかない。

アルクの記憶が正しければ、彼が目覚めたのは地下一階のはずだった。三年前、彼は地下一階のカプセルを使用したのだ。二人はまだ階段を上っていないので、彼らの現在地は地下一階となる。階段を見つけて一階に上がれば、出口はもうすぐだろう。加えて地上には陽光もある。一階へ行けさえすれば後は楽だ。

だが、そうは言っても簡単には問屋が卸してくれない。肝心の階段がどれだけ捜しても見つからないのだ。

「なあ、スーリア。君は他の生存者たちと結構長い間ここにいたんだろう？　その時、構造は把握しなかったのか？」

「してないわ。あの時は逃げるので精いっぱいだった。今みたいにスキルが使えなかったからね」

スーリアは自分たちの周りに浮かんでいる小さな魔法陣を指差した。認識阻害魔法――アルクがスキルを用いて形成した、二人を守る壁。これがあるため、二人はあれからリーパーに見つからずに済んでいた。

「なるほど。うーん……どうしよう……」

肩を落とし、アルクは考え込む。会話が止み、しっとりと静かな空気が流れる。スウッと、生温かい風が抜けた。スーリアのしなやかな髪が、ほんの僅かにだが揺れる。するとスーリアはポンと手を叩いた。

「風よ！　風がある方に行けばいいんだわ！」

「風……そうか！」

アルクは自らの服の袖を破った。彼が着用していた、高密度スーツと呼ばれるカプセル使用のための専用スーツは、極めて薄い素材でできている。ゆえに風を良くはらむ。ビニール質の薄っぺらな布は、そよ風にも満たないほどの風に驚くほどよくなびいた。

「こっちだ」

布の揺れの導くまま、二人は暗闇を進む。足音を出来るだけ立てないようにすべく、ゆっくりと滑るように。そうして角を一つ曲がり、二つ曲がり……。やがて二人は、先ほどリーパーの居た辺りへと戻ってきた。布の揺れ幅が、だんだんと大きくなる。風がはっき

りと肌で感じられるようになってきた。

「そろそろか……」

「ええ、たぶん。あッ！」

廊下の端に光が見えた。ヒカリゴケとは違う、白く明るい光。スーリアは喜び勇んで光の方へと駆けだす。だが次の瞬間、アルクが彼女の肩を掴む。

「待った！」

「えッ？」

「あれ」

まばゆい光の陰に、キラリと輝く白いものが見えた。スーリアが眼を凝らしてみると、それはリーパーだった。しかも、一体ではない。何体ものリーパーが、門番のように階段周辺を守っている。連中は光の陰に隠れながら、じっと何かを待ちかまえているようだ。二人は慌てて通路を戻り、角へと身をひそめる。

「チッ、あんなところにリーパーの群れが居るなんて……」

「あそこだからだよ。階段の前で待っていればそのうち餌が来るって、やつらはわかってるんだ」

「なるほど、考えたものね。……それでどうする？　さっきの技で強行突破する？」

スーリアは両手で大きく丸を描いた。スイカを撫でているようなそのしぐさは、プラズマボールを示しているのだろう。それを見たアルクは気難しい様子で眉を寄せる。

「あれは一直線上にいる敵しか効果が無いからなあ。群れ相手だと力を発揮できるかどうか……。スーリアの方は何かいい手はないの？」

「実を言うと……私、回復スキルしか使えないのよ。目覚める前の記憶がどうにも曖昧でね……」

スーリアは顔を下に向けた。華奢な肩が大きく下がり、口から小さく吐息が漏れる。

「ごめんね、役立たずで。本当は私じゃなくて他の誰かが残れば……」

「そんなこと言うなよ！　大丈夫、リーパーは俺が何とかするから」

アルクはスーリアの肩をしっかりと押さえた。平熱が低いからのか、細い肩は少し冷たく感じる。アルクはスーリアの存在が酷く頼りなく、また儚く思えた。まるで陽光に溶ける美しい雪像――色白なことも相まってか、彼にはスーリアがそんなふうに見える。ゆえに、彼はスーリアを腕にしっかりと抱きしめた。

「な、何をするのよ……」

「ごめん、つい」

「別にいいわ、あなたのことは……嫌いではないから」

ハッとした様子で、二人は離れた。スーリアはいつもの無表情に戻ると、アルクから顔をそむける。その頬はほんのりと桜色に染まっていた。アルクは気恥ずかしそうにスーリアから顔をそらすと、角からリーパーたちの様子を伺った。アルクの背中の後ろから、スーリアもそっと覗きこむ。

「連中はかなり密集してる。一瞬しか時間を稼げないけど……あれなら爆発呪文で何とかなるかもしれない」

「爆発呪文？」

「ああ。目くらましようのスキルさ。一瞬しか効果がないし、敵が散開してると使い物にならないから微妙だけど……。ここはこれに賭けるしかないかな。真正面からじゃ勝ち目はないし」

「私はあまりスキルに詳しくないわ。だから、あなたに従う。あなたの考えるようにすればいい」

「よし、じゃあ使おう」

アルクとスーリアはアイコンタクトをとった。二人は互いに深くうなずく。アルクは手を顔の前に突き出すと呪文の詠唱を始めた。スーリアはそれを、固唾をのんで見守る。

「さあ、行くよ……エクスプロージョン！」

リーパーの密集している場所の中心。そこから一気に光があふれた。遅れて爆音が周囲に轟く。その爆音と光の嵐の中を、二つの足音が駆け抜けていった――。

第四話

光の嵐の中を、アルクとスーリアは駆ける。二人は眼を細めながらも、階段に向かってまっすぐに走っていた。そのすぐわきをリーパーたちの鎌が通り過ぎる。視覚を奪われた彼らは、ただただやみくもに鎌を振りまわしていた。しかももともと密集していたのがあだとなり、半ば同士討ちのような惨状となっている。

だが、流石は上位モンスターというべきか。人間ではありえない速度で彼らの眼は回復した。眼が回復すると同時に、彼らは一斉にアルク達へと狙いを定める。あてずっぽうに振るわれていた鎌が、本来の精度を取り戻した。一本の鎌が、先陣を切っていたアルクの足を裂く。

「アルク！」

「大丈夫だ、先に行って！」

「でも、それじゃあなたが……」

「いいから、早く！」

アルクはスーリアを先に行かせた。スーリアはすぐに階段を昇りきり、アルクの方へと手を伸ばす。アルクはそれに応えようと精一杯足に力を込めた。だが、徐々に足は重くなっていく。傷はアルクが思っていたよりかなり深いようだ。神経でも切られたのか足は鉛のようで、走るどころか早歩きをするのが精いっぱいである。

一旦は抜き去ったはずのリーパーの群れ。階段をゆっくりと押し

合いながら昇る死の行列が、徐々にアルクに迫る。スーリアは息を呑んだ。アルクは険しい顔をスーリアに向けると、大声で吼える。

「クソッ、こうなったらスーリアだけでも逃げてくれ！　俺は行けそうにない」

「嫌！」

スーリアが階段を駆け降りた。白い手がアルクの肩を抱える。自然と支えてもらう体勢となったアルクは、スーリアの顔を見て叫んだ。

「早く、早く手を離して逃げるんだ！」

「駄目！　それじゃあなたが殺されてしまう」

「でもこれじゃ二人とも……」

「二人とも助かる！」

スーリアは毅然としていた。彼女は手に力を込め、必死にアルクの身体を押す。アルクも黙ってうなずき、それに応えた。二人の足が速まり、階段をあともう少しで抜けられるところまで来る。

しかし、そんな二人の後ろにはリーパーが居た。人数が多すぎる彼らは、狭い通路を押し合うようにしてやってくる。その動きは亀の歩みのごとく遅い。だが、二人はそれになんとか追いつかれないようにするだけで精いっぱいだ。

「あと少し……」

階段の終わりがはっきりと見えた。ラストスパート――二人の足が急速に早まる。二人は階段を昇り終えると、そのままの勢い地面に身体を投げ出した。ドンと音がして、二人の身体が柔らかな地面に受け止められる。

「はあ、はあ……早く逃げないと……」

「そうね……あら？」

立ち上がり、すぐに追いかけてくるであろうリーパーから逃れようとする二人。だが、階段から来るはずのリーパーの動きが何故か急激に鈍っていた。リーパーたちはみな、顔を手で覆い隠すようにしている。そして同時に彼らから、何やら呻くような叫びが聞こえてきた。

「もしかしてこいつら……日に弱いのか？」

「そういえばリーパーって、洞窟とかにしかいなかったわね」

二人は周りを見回した。センターの地上部分はすっかり壊れてしまったようで、辺りは荒涼とした廃墟が広がっている。そのおかげで二人の居る場所は遮るものがなく、かなり明るかった。もっとも空は鉛色で、霧が深く、人間にとっては薄暗いというのが適正なくらいの明るさだ。しかし、それでも暗闇に適応したリーパーにとっては十分脅威となるらしい。

「よし、今のうちに……」

アルクはほっと息をつくと、呪文を唱え始めた。ヒュウヒュウと

風が唸り、大気が震える。

「何をするの？」

「潰すのさ。……エアハンマー！」

強大な風の塊が地面に振り下ろされた。激しい地響きと地震さながらの揺れが二人を襲う。震える二人の前にパックリと開いていた地下への入口は、またたく間に砂煙にのまれていった。ゴロゴロと音が響いて、おぞましい叫びが奥から聞こえてくる。

「おおっ！」

砂煙が晴れると、階段はすっかり土に埋もれていた。壁もすっかり崩壊したようで、巨大なコンクリートの塊が崩れた土に混じっている。これではさすがのリーパーも当分の間は出てこられないだろう。二人は脱力してしまったようで、その場にへたりこむ。

「これでしばらくは安心ね。あなた、回復スキルは使える？」

「いや、俺は攻撃と補助専門だ。回復はほとんど使えないよ」

「じゃあ、足を貸して。治してあげるから」

アルクはスーリアの方に足を投げ出した。傷口から血が絶え間なく流れている。スーリアは身体を血に濡らしながらも、アルクの足を手で抱えた。彼女は眼を閉じると、歌い上げるように呪文を唱える。透明で清らかな旋律がアルクの心を震わせる。蒼い空の果てより聞こえてくるようなその美しい呪文は、アルクも初めて聞くものだった。

淡い光の粒子が傷口に注ぎ、白い靄が上がる。逆再生をかけたように傷が再生し、すぐに元の綺麗な状態へと戻った。アルクは驚きで眼を丸くする。

「すごい、こんな治療魔法始めてみた！　ひょっとしてレアスキルなの？」

「わからないわ、記憶があいまいだもの。でも、私に使えるのはこのスキルと各種状態異常の治療スキルだけ」

「十分だ。それだけで回復職としてやっていけるよ」

「ふふ、ありがとう」

スーリアの顔にパッと華が咲いた。それにつられて、アルクも満面の笑みを浮かべる。二人は大きな声で笑い始めた。周囲に快活で実に晴れ晴れとした様子の声が響く。二人はそのまま背中を地面に預け、白い空を眺めた。やがて笑い声は消え、静謐な風が二人の頬を撫でる。

「なあ、スーリア」

「何？」

「ここ、どこだろう？　エデンでもないし、御坂市でもなさそうだよな……」

周囲に広がる混沌とした風景。コンクリートの塊が一面に散らばり、破壊されたビルの残骸が醜態をさらしている。コンクリートに

覆われた地面の僅かな隙間からは、太い茨のような植物が這い出していた。色は原色の緑で、なんとも毒々しい。白く厚い霧に覆われた茨と廃墟の様は、さながらジャングルと世紀末が混合されたような雰囲気だった。アルクが記憶している自らの街――御坂市の様子とは明らかに異なっている。

「うーん、御坂市が廃墟になったのかしら……？　……とにかく情報が必要だわ」

「ああ、そうだな……」

二人は立ち上がると、道なき道を歩き始めた。霧はどこまでも果てしなく続き、二人の行く手を阻む。アルクとスーリアは粗末なスリッパしか履いていない足をいたわりつつも、濃密な霧をかき分けていく。すると、遠くの方にぼんやりとした明りが見えた。まるで灯台のように、その光は周囲を照らしている。

「霧の終わりかな？」

「そうかもしれないわね。行ってみましょう」

駆けだしたアルク達。すでに周囲は瓦礫の平原ではなくうっそうとした高層ビルの林と化していた。密集したビルの残骸の谷間を潜り抜け、二人は勢いよく走っていく。すると――

「繭？」

それは巨大な繭のようだった。純白の糸が無数に絡まり合い、ドーム球場並みに巨大な球体を形成している。繭の周りにあるビルの残骸が、ひどくちっぽけに見える。繭はそれほど大きく、圧倒的な

存在感を放っていた。

この巨大極まる繭の奥は薄ぼんやりと輝いていた。煌々と温かな光を放つそれこそが、いま二人の見た光の正体なのだろう。二人は眼の前の光景が信じられず、眼を手で擦る。

「モンスターの繭か？」

「まさか。こんなに巨大な繭から生まれるモンスターって、どれだけ大きいのよ。あり得ないわ」

「そりゃそうだけど……。これ、どう見たって繭だろ」

呆れたように二人は言葉を交わす。エデンで最も巨大なモンスターは『マウンテンドラゴン』だが、それでさえもせいぜい小さなマンションぐらいのサイズだろう。この繭のように数百メートル単位の大きさを誇るモンスターなど、二人は見たことがない。彼らは半ば茫然としたように、繭を見つめる。するとここで、二人の耳を切り裂くかのような悲鳴が聞こえてきた。

「た、助けてくれェ！　俺はまだ死にたくないィ！」

とっさに悲鳴のした方へと駆けだした二人。するとそこには、糸と繭に飲み込まれかけた男の姿があった――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2935ba/

ログアウトの先に

2012年1月13日00時45分発行